

桃の天守新聞

激動の時代を生き抜いた 姿を変える和歌山城



大正十三年、羽柴秀吉が弟の秀長に命じて虎伏山の峰に築城された和歌山城。慶長五年に浅野幸長が黒板張りの連立式天守を建て、大手筋を基軸とする正方位の町割りで、城と城下町の形を整備した。元和五年、徳川家康の十男頼宣が入城し、紀州徳川家が成立。二の丸西部砂の丸、南の丸を増築し、ほぼ現在の形の和歌山城の姿となった。城のシンボルである連立式天守は寛政十年に黒板張りから白壁に外観が一新されたが、弘化三年に落雷で焼失。その四年後に再建された二代目天守閣も、昭和二十一年に空襲により再び焼失。現在のものは鉄筋コンクリートで造られた三代目である。



▲厄除けの桃瓦



和歌山城の天守閣
天気の良い日に行くと、映えな写真が撮れる

殿が愛した季節の美

名勝、西之丸庭園。その紅葉の見事さから「紅葉溪庭園」とも呼ばれている。江戸時代初期に作庭されたこの庭園は、城の内堀を池に見立てて景色に取り込んでいるのが特徴である。徳川期、浅野期にも茶室が建てられており、代々の将軍も四季の美しさに包まれながら茶を楽したのであろう。江戸時代、二の丸と西の丸を繋ぐ御橋廊下は藩主と限られた人物のみが通ることが許されていた。そのため、屋根と壁を設け外から見えない構造になっていて、斜めにかかる廊下橋として全国的に珍しい造りとなっている。



▲御橋廊下
窓から見える天守閣は絶景

石垣に積もった四百年の歴史

和歌山城の魅力の一つは城主三代を通じて積まれた多様な石垣である。積み方や石材の違いを比べることで、和歌山城の歴史を辿ることができる。中でも浅野期の石垣を中心に見られる刻印が特徴であり、その模様は○、△、□、×といった単純な記号の組み合わせから鳥の図など多岐に渡る。刻印の目的は不明だが、城内北東部の石垣の桃の刻印は鬼門除けとして刻まれたのではないかと推測されている。刻印は年々薄らいでおり見るならば今がチャンスである。



▲見ることが出来る刻印一覧



▲桃の刻印(○の中)

学芸員さんに聞いた!! 和歌山城への熱い思い

わかやま歴史館で学芸員の杉山純平さんにお話を伺った。

- Q 歴史の中で一番大変だったと思うことは?
- A 明治に廢城の動きがあったこと。当時は歴史的価値という考えはなく、天守閣は不要なものとされた。
- Q 他の城にはない和歌山城の強みは?
- A 連立式天守。天守閣の中央に庭があることで籠城に向けた造りになっている。
- Q 和歌山城の存続にはどのような問題が?
- A 天守閣の地震対策。建て替えにも修繕にもお金がかかる。
- Q 和歌山城の魅力を伝えていくためには?
- A 和歌山城でのイベントの際に天守閣も見てもらいたい。城の特徴を広く興味を持ってもらうことが必要。

和歌山城と忍者と私 編集後記

取材中、おもてなし忍者と出会った。彼らはきた和歌山城。先代の意志を、今度は私たちが引き継ぐ番だ。ぜひ和歌山城に足を運び、その歴史の重みを感じて頂きたい。



▲忍者との写真



▲学芸員さんと新聞記者